

【一】 次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

見えない人が「見て」いる空間と、見える人が目でとらえている空間。それがどのように違うのかは、一緒に時間を過ごす中で、ふとした瞬間に明らかになるものです。

たとえば、先ほども登場していただいた（注1）木下路徳さんと一緒に歩いているとき。その日、私と木下さんは私の勤務先である東京工業大学（注2）大岡山キャンパスの私の研究室でインタビューを行うことになっていました。

私と木下さんはまず大岡山駅の改札で待ち合わせて、交差点をわたってすぐの大学正門を抜け、私の研究室がある西9号館に向かつて歩きはじめました。その途中、一五メートルほどの緩やかな坂道を下っていたときです。木下さんが言いました。「大岡山はやつぱり山で、いまその斜面をおりているんですね」。

私はそれを聞いて、かなりびっくりしてしまいました。なぜなら木下さんが、そこを「山の斜面」だと言ったからです。毎日のようにそこを歩き来していましたが、私にとってはそれはただの「坂道」でしかありませんでした。

つまり私にとってそれは、大岡山駅という「出発点」と、西9号館という「目的地」をつなぐ道順の一部でしかなく、曲がってしまえばもう忘れてしまうような、空間的にも意味的にも他の空間や道から（注3）分節化された「部分」でしかなかった。それに対して木下さんが口にしたのは、もつと（注4）俯瞰的で空間全体をとらえるイメージでした。

確かに言われてみれば、木下さんの言う通り、大岡山の南半分は駅の改札を「頂上」とするお椀をふせたような地形をしており、西9号館はその「ふもと」に位置しています。その頂上からふもとに向かう斜面を、私たちは下っていました。

けれども、見える人にとって、そのような俯瞰的で（注5）三次元的なイメージを持つことはきわめて難しいことです。坂道の両側には、（注6）サークル勧誘の立て看板が立ち並んでいます。学校だから、知った顔とすれ違うかもしれません。前方には混雑した学食の入り口が見えます。目に飛び込んでくるさまざまな情報が、見える人の意識を奪っていくのです。あるいはそれらをすべて（注7）シャットアウトしてスマホの画面に視線を落とすか。そこを通る通行人には、自分がどんな地形のどのあたりを歩いているかなんて、想像する余裕はありません。

そう、私たちはまさに「通行人」なのだとき思いました。「通るべき場所」として定められ、方向性を持つ「道」に、いわばベルトコンベアのように運ばれている存在。それに比べて、まるでスキーヤーのように広い平面の上に自分で線を引く木

下さんのイメージは、より開放的なものに思えます。

物理的には同じ場所に立っていたのだとしても、その場所に与える意味次第では全く異なる経験をしていることになる。それが、木下さんの一言が私に与えた驚きでした。人は、物理的な空間を歩きながら、実は脳内に作り上げたイメージの中を歩いている。私と木下さんは、同じ坂を並んで下りながら、実は全く違う世界を歩いていたわけです。

①彼らは「道」から自由だと言えるのかもしれませんが。道は、人が進むべき方向を示します。もちろん視覚障害者だって、個人差はあるとしても、音の反響や（注8）白杖の感触を利用して道の幅や向きを把握しています。しかし、目が道のずっと先まで一瞬にして見通すことができるのに対し、音や感触で把握できる範囲は限定されている。道から自由であるとは、予測が立ちにくいという意味では特殊な慎重さを要しますが、だからこそ、道だけを特別視しない俯瞰的な（注9）ビジョンを持つことができたのでしょうか。

全盲の木下さんがそのとき手にしていた「情報」は、私に比べればきわめて少ないものでした。少ないどころか、たぶん二つの情報しかなかったはずです。つまり「大岡山という地名」と「足で感じる傾き」の二つです。しかし情報が少ないからこそ、それを解釈することによって、見える人では持ち得ないような空間が、頭の中に作り出されました。

木下さんはそのことについてこう語っています。「たぶん脳の中にはスペースがありますよね。見える人だと、そこがスーパ―や通る人だとかで埋まっているんだけど、ぼくらの場合はそこが空いていて、見える人のようには使っていない。でもそのスペースを何とか使おうとして、情報と情報を結びつけていくので、そういったイメージができてくるんですね。さつきなら、足で感じる『斜面を下っている』という情報しかないの、これはどういうことだ？ と考えていくわけです。だから、②見えない人はある意味で余裕があるのかもしれないね。見えると、坂だ、ということまで気が奪われちゃうんですね。きつと、まわりの風景、空が青いだとか、スカイツリーが見えるとか、そういうので忙しいわけだね」。

まさに情報の少なさが特有の意味を生み出している実例です。都市で生活していると、目がとらえる情報の多くは、人工的なものです。大型スクリーンに映し出されるアイドルの顔、新商品を宣伝する看板、電車の中吊り広告……。見られるために設えられたもの、本当は自分にはあまり関係のない「意味」を持たないかもしれない、純粋な「情報」もたくさんあふれています。視覚的な注意をさらっていくめまぐるしい情報の洪水。確かに見える人の頭の中には、木下さんの言う「脳の中のスペース」がほとんどありません。

それに比べて見えない人は、こうした洪水とは無縁です。もちろん音や匂いも都市には氾濫していますが、それでも木下さんに言わせれば「頭のなかに余裕がある」。さきほど、見えない人は道から自由なのではないか、と述べました。この「道」は、物理的な道、つまりコンクリートや土を固めて作られた文字通りの道であると同時に、比喩的な道でもあります。つまり、「こつちにおいで」と人の進むべき方向を示すもの、という意味です。

人は自分の行動を一〇〇パーセント自発的に、自分の意志で行っているわけではありません。知らず知らずのうちにまわりの環境に影響されながら行動していることが案外多いものです。

「寄りかかって休む」という行為ひとつとっても、たいていは寄りかかろうと思って壁を探すのではなくて、そこに壁があるから寄っかかってしまう。子どもの場合は特にその割合が高くなります。「いたずら」とはたいていそうしたものです。ボタンがあるから押したくなるし、台があるからよじ登ってしまいます。環境に埋め込まれたさまざまなスイッチが(注10)トリガーになって、子どもたちの行動が誘発されていきます。

いわば、人は多かれ少なかれ③環境に振り付けられながら行動している、と言えるのではないのでしょうか。

あるトリガーから別のトリガーへとめまぐるしく注意を奪われながら、人は環境の中を動かされていきます。人の進むべき方向を示す「道」とは、「こつちに来なさい、こつちに来てこうしなさい」と、行為を次々と導いていく環境の中に引かれた導線です。

たとえば京都の(注11)桂離宮に行くとき、その場所ですどこを見るべきかというまなざしの行方までもが計算されていることに気づきます。人の行動をいざなう「道」が随所に仕掛けられているわけです。実際に訪れてみて、桂離宮というのはまるで

(注12) 舞踏譜のような感じに感じました。

桂離宮ではひとつの道が明瞭に引かれています。都市においては無数の道が縦横無尽に引かれています。しかもその多くは、人の欲望に強く訴えてくる。真夏のかんかん照りの道にコーラの看板があれば飲みたくなってしまったり、「本日三割引」ののぼりを見ればついスーパーに入って余計な買い物をしてしまう。その欲望がもとも私の中にあつたかどうかは問題ではありません。視覚的な刺激によって人の中に欲望がつけられていき、気がつけば「そのような欲望を抱えた人」になっています。

(注13) 資本主義システムが過剰な視覚刺激を原動力にして回っていることは言うまでもないでしょう。それを否定するのは簡単ではないしするつもりはありませんが、都市において、④私たちがこの振り付け装置に踊らされがちなのは事実です。最近

ではむしろ、パソコンのデスクトップやスマートフォンの画面上に、こうしたトリガーは増殖しているかもしれません。仕事をするつもりでパソコンを開いたら買い物をしていた……よくあることです。私たちは日々、軽い記憶喪失に見舞われています。いったい、私が情報を使っているのか、情報が私を使っているのか分かりません。

(伊藤亜紗『目の見えない人は世界をどう見ているのか』)

(注1) 木下路徳さん 一九七九年生まれ。生まれつき弱視で十六歳のときに失明。現在は全く目が見えない。

(注2) 大岡山 東京都の地名。

(注3) 分節化 切り分けること。区別すること。

(注4) 俯瞰 高所から見おろしてながめること。

(注5) 三次元的 立体的ということ。

(注6) サークル 趣味を同じくする人の集まり。

(注7) シャットアウト 閉め出すこと。

(注8) 白杖 目の不自由な人が歩行する際、使用する白い杖。

(注9) ビジョン 展望。

(注10) トリガー 引き金。ある物事を引き起こすきっかけになるもの。

(注11) 桂離宮 京都にあるたてものと庭園。江戸時代のはじめにつくられた。

(注12) 舞踏譜 舞踏の動きを文字や記号を用いて記録したもの。

(注13) 資本主義システム 経済のしくみのひとつ。

問一 傍線部①「彼らは『道』から自由だと言えるのかもしれませんが、「彼らは『道』から自由だ」とは、どういうことですか。

問二 傍線部②「見えない人はある意味で余裕がある」とは、木下さんによれば、どういうことですか。

問三 傍線部③「環境に振り付けられながら行動している」とは、どういうことですか。次の解答欄に合うように本文中から三十文字以内で抜き出し、その最初と最後の五文字を答えなさい。（字数には句読点等もふくみます。）

問四 傍線部④「私たちがこの振り付け装置に踊らされがちなのは事実です。」とありますが、「この振り付け装置に踊らされ」とは、どういうことですか。次の解答欄に合うように四十字以内で答えなさい。（字数には句読点等もふくみます。）

[illegible]

と。いう。

誕生日に獵犬りようけんのブルーを買ってもらったマール・ヘンリーは、毎朝学校に行く前、仕かけたわなをブルーと森まで見に行くのを日課としていた。あるとき、学校でバーンズ先生の口まねをして先生を怒おこらせたマール・ヘンリーは翌朝早く学校に来るように命じられた。次の日の朝、学校に向かうマール・ヘンリーのあとについてきたブルーをマール・ヘンリーは森の入り口に置き去りにしてしまふ。その日の午後、マール・ヘンリーは森に仕かけたわなに引つかかつて脚あしを血まみれにしたブルーを発見した。

だが、マール・ヘンリーは気にしなかった。喉のどに大きなかたまりがこみあげてきた。(注1)『黄色い老犬』を思い出さないうちに必死だった。この事故をちゃんと片づけて、あの話のような悲しい最後にならないようにしなくてはならない。

「母さん！ 父さん！」 ゴーディは、ポーチの階段からどなった。

「ぼくがハリソン先生のところへ連れていこうか？」　ゴードイが言った。

「父さん、おれが払うよ」

父さんはゴーデイにトラックの鍵かぎを渡わたした。

マール・ヘンリーは、自分のシャツにブルーの血がべつとりついているのを見て、父さんがどうにもならんだろうと言った意

味がわかった。

母さんは片手で口をおおい、もう一方の手をおなかにおいていた。

ゴードイがトラックのエンジンをかけた。父さんたちがマール・ヘンリーのそばへやってきた。

「さあ、ブルーをかかえてやるから、乗れ」

父さんが、シャツにくるまれたブルーをかかえた。それから、トラックに乗り込んだマール・ヘンリーにブルーを渡すと、母さんが車の中へ体を入れて、ブルーの頭をなでた。母さんの耳にはさんでいた鉛筆が落ちた。母さんは「ひやつ」と声をあげ、ブルーの上に落ちるまえにそれをつかんだ。

① 医者のあるグレンモールの町までは、近道を行って八キロくらいだったが、今日はとてつもなく長い旅に思えた。マール・ヘンリーは初めて、兄さんが無口な人で助かったと思った。何があったのか、うるさくたずねられるのがいちばんつらいからだ。車は泥道を進み、やがて、背の高い松の木立が茶色と緑色のもやがかかったようになり、遠のいていった。ハリソン先生の診療所に着くと、ちょうど先生はドアの前において、鍵をかけているところだった。

すぐにゴードイがトラックからとびおりた。

「先生、怪我をした犬がいるんです。診てくれませんか？」

ハリソン先生は、血だらけのシャツで包んだブルーをかかえて、トラックからおりてきたマール・ヘンリーを見た。

「なんてことだ。車にひかれたのか？」

「いいえ、わなにかかったんです。おれがしかけたわなです」マール・ヘンリーが答えた。

先生はいったん鍵を閉めたドアをあけてくれた。

「入りなさい。わたしは獣医じゃないが、できるだけやってみよう」

数分後、先生はブルーに注射をうってくれた。ブルーが眠たくなっておとなしくなると、先生は脚にがつちり食い込んだわなをはずしにかかった。診察台の上でのびているブルーを見て、マール・ヘンリーは、後脚の下部分が体からとれそうになっているのに気づいた。

先生が言った。

「ゴードイ、弟を連れて帰りなさい。どうなるかわからないから、期待しないでほしい。状態はかなり悪い」

ゴードイはマール・ヘンリーの腕をつかんだ。

「行こう」

マール・ヘンリーは動かなかった。最高の友だちのそばを離れたくなかったのだ。ハリソン先生は顔をしかめた。

「ここにいたって、きみには何もできない。明日、知らせるから」

「こちらから電話しなくちゃなりません。うちには電話がないんで」とマール・ヘンリーが言った。

黙りこくって家に帰る車の中で、ダッシュボードによりかかり、マール・ヘンリーは思った。ああ、ゴードイみたいな本好きで、わな猟なんかやらずに、家で本を読んでいたればよかったのにな。

ゴードイが家の前にトラックをとめたとき、マール・ヘンリーははつとして喉が詰まった。ごくんと飲みこむと、ゴードイにさいた。

「なあ、兄さん、先生はブルーを撃つつもりかな？」

ゴードイは首を横に振った。

「いや、先生は、動物をずっと眠らせる薬を持ってるよ」

「ずっと？」

「ああ、永遠にさ」

なんとなく、マール・ヘンリーは、ゴードイが言っているのがぜんぶほんとうだとは思えなかったが、ただ、もしブルーが戻ってこなかったら、永遠に楽しい夢を見たまま置いてほしいと願った。

ポーチの階段をのぼるマール・ヘンリーの足は重たかった。玄関で、母さんが腕を大きく広げて迎えてくれた。マール・ヘンリーは母さんの胸にとびこんで、泣いた。母さんの肩ごしに、父さんが背を向けて、部屋を出ていくのが見えた。マール・ヘンリーは言った。

「父さんはわなを早くどかせと言ったんだ。だけど、おれはそうはしなかった。おれが悪かったんだ」
母さんはマール・ヘンリーの背中をぽんぽんとやさしくたたき、言ってくれた。

② (注3) ガンボが煮えてるの。おいしいわよ」
だが、マール・ヘンリーはまったく食べられなかった。罪の意識が体じゅうに巣くついていたからだ。

とうとう、マール・ヘンリーは言わなきゃいけなかったことを両親に打ち明けた。学校でバーンズ先生に罰を受けたことをだ。バーンズ先生が田舎に住む自分たちのことをあざわらう口まねをやつて、見つかつてしまったからだ、と話した。それがブルーの身に起こったことと関係している気がした。マール・ヘンリーは、バーンズ先生のせいだと思いたかったが、やつぱり悪いのは自分だとわかつていた。

話を聞いていた父さんのこめかみがびくびく動き、あごの線がきつとはりつめた感じになった。マール・ヘンリーは、てつきりお尻をぶたれると思った。

「バーンズがなんと言っただと？」父さんはどなり声をあげた。

「おれたちを野暮連中と言ったんだ。男どもは毎晩、ウィグ・ワム酒場で飲んだくれてるつて」

「落ち着いて、ルーサー」母さんが割つて入った。「知ってるでしょ、あの人は自分がニューオーリンズ出だと言つて、いばつてるのよ。でも、それはちがうの。わたしは知っているわ。あの人は郊外のシャルメット出よ。ニューオーリンズなんかじゃない」

母さんの言葉は父さんの耳には入らなかった。父さんは、今にも噴火しそうな顔をしている。

ほんの一瞬、マール・ヘンリーは、父さんがバーンズ先生のことであつかしているのを見て、^③なんだかほつとした。だが、ブルーのことがまたひどく気になってきた。ブルーがいなくなったら、代わりの者なんか、この世にはいない。

「マール・ヘンリー、お風呂を用意してあげるわ。食事が終わつて、みんなが台所から出たらね」と、母さんが言った。

父さんが椅子をひいて、テーブルを立つた。

「ちよつと出てくる」

次の瞬間、玄関のドアがバタンと閉まつた。マール・ヘンリーは、母さんが「まあ、どうしましょう！」と叫んだのを聞いた。その晩遅くまで、ベッドに横になつたまま、マール・ヘンリーはうちに電話があればよかったのに、と思つていた。やがて、電話があつてもどうしようもないことに気づいた。医者は犬のことくらいで夜中に電話などしてこないのだから。

次の日、マール・ヘンリーは学校へ行きなくなかつた。だが、母さんが行きなさいと言つた。

「行くまえに、一緒にフエイの家へ行つて、ハリソン先生に電話をかけさせてもらいましょう」

「まだ早すぎるよ。診療所はあいてない」

ふと、マール・ヘンリーは父さんが台所にいないことに気づいた。だが、トラックは前庭にある。

「父さんはどこ？」

そのとき、寝室から大きなびぎが聞こえてきた。

母さんは顔をしかめた。

「いつもの頭痛よ。ゴードイに、もうバスが来るから行きなさい、と言つてちょうだい」

マール・ヘンリーは寝室へ行こうとした。すると、母さんが言った。

「ちよつと待つて」

マール・ヘンリーは振り向いた。

母さんはふうつとため息をついた。

「人生には、自分がしでかしたことの代償を払わなくちゃならないときがあるの。それを昨日、あなたは学んだのよ」

マール・ヘンリーはあうなだれた。

「わかつてるよ、母さん」

体育の時間になつて、バーンズ先生が休みだとわかつた。ウィグ・ワム酒場で、田舎の人間とやりあつて負けたのだそうだ。そういえば、昨日の夜、父さんが出かけていったつけ……。ふだんなら、父さんがバーンズ先生をぶんぐつてるところを想像して、得意な気持ちになつただろうが、今日はそれどころではなく、ただブルーのことが気になつてしかたがなかつた。

学校が終わると、マール・ヘンリーはいつものようにスクールバスへ向かつた。そのとき、だれかが呼んだ。

「マール・ヘンリー！」

母さんが駐車場でトラックの前に立つていた。かなり遠いので、悲しそうな顔をしているのか、そうでないか、よくわからない。見えたのはただ、風になびく母さんの褐色の髪と、大きなおなかをおおっている花柄のエプロンだけだつた。

マール・ヘンリーはゆつくりと母さんのほうへ歩いていった。どうして母さんが迎えにきたんだろうと考えると、不安でたまらなかつた。

母さんはもう知つてるんだ。(注4)ポッサムおじさんのことを伝えにきたときと同じじゃないか。だけど、たとえ同じでも、

今日はソフトクリームを食べる気にはぜったいにならない。わなにミンクやフクロネズミやリスがかかつていようがいまいが、どうでもいい。もう、森には二度と入りたくない。

マール・ヘンリーは母さんの前までくると、母さんのくたびれた靴の先を見つめた。④顔をあげるのがこわかった。

母さんはマール・ヘンリーのあごに手をあてて顔をあげさせ、ふわつと笑いかけた。キャメイ石けんのいいにおいがした。

「さあ、いらつしやい」母さんはマール・ヘンリーの肩を抱いた。

マール・ヘンリーはもう十三歳だったが、おとなしく母さんに肩を抱かれて、トラックの助手席側のドアまで行つた。こんなところをだれに見られていようと構わなかった。

母さんがドアをあけると、座席に段ボールが置いてあつた。

えっ何、これ？ もしかして？

「ブルー！」

マール・ヘンリーは大声をあげて、体をかがめ、ブルーにふれた。

ブルーはマール・ヘンリーの手をなめ、尻尾を振った。箱の縁にパタパタあたっている。けがをした左脚の残った部分が、白い包帯でぐるぐる巻きにされている。

マール・ヘンリーは母さんを見上げた。母さんの顔にはほほえみが大きく広がり、歯がのぞいた。

(キンバリー・ウィリス・ホルト作 谷口由美子訳『ローズの小さな図書館』)

(注1) 『黄色い老犬』以前にマール・ヘンリーが読んだ本の名前。

(注2) ゴーディマール・ヘンリーの兄。マール・ヘンリーと同じ学校に通っている。

(注3) ガンボとろみのあるスープ。アメリカ南部の家庭料理のひとつ。

(注4) ポッサムおじさん「母さん」の弟。マール・ヘンリーにわなの仕かけ方を教えた。マール・ヘンリーはおじさんのことが大好きだったが、若くして亡くなってしまう。亡くなった当日、「母さん」は隣町ルコントにある「ホイップディップ・アイスクリーム」という店にマール・ヘンリーを連れて行き、おじさんをしのでソフトクリームを食べた。

問一 傍線部a「うなだれた」、b「くたびれた」の意味として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

a 「うなだれた」

ア 大きくうなずいた

イ 力なく下を向いた

ウ 苦しげな声をもらした

エ 必死に涙をこらえた

オ 思わずしやがみこんだ

b 「くたびれた」

ア 形が変わった

イ 足になじんだ

ウ 価値があがった

エ 役に立たなくなった

オ 使い古した

問二 傍線部①「医者のあるグレンモーラの町までは、近道を行って八キロくらいだったが、今日はとてつもなく長い旅に思えた。」とありますが、「とてつもなく長」く感じられたのは、なぜですか。

問三 傍線部②「ガンボが煮えてるの。おいしいわよ」とありますが、このとき、「母さん」はどのような気持ちで言ったのですか。

問四 傍線部③「なんだかほつとした。」とありますが、それはなぜですか。

問五 傍線部④「顔をあげるのがこわかった。」とありますが、それはなぜですか。

【三】 次のカタカナの部分に漢字に直しなさい。

- | | | | | | |
|----|--------------|----|----------------|----|-----------------------------|
| 1 | 面会シヤゼツ。 | 2 | ショウフクしかねる条件。 | 3 | 選挙のコウホ者。 |
| 4 | 神社のトリイをくぐる。 | 5 | さじカゲンが分らない。 | 6 | 負傷者をキュウゴする。 |
| 7 | キンセイのとれた体つき。 | 8 | きびしいカンパにおそわれる。 | 9 | コウゴウ陛下のお召し物 ^{もの} 。 |
| 10 | 情報をテイキョウする。 | 11 | 荷物をアズかる。 | 12 | よくコえた土地を耕す。 |
| 13 | 新聞紙をタバねる。 | 14 | 大学で学問をオサめる。 | 15 | アツく切ったステーキ肉。 |

Downloaded from <http://ajphaphysocpharm.sagepub.com> at National Archive Publishing Co on June 11, 2015

$$x_0, x_1, \dots, x_n$$

コーラの看板や「本日三割引き」ののぼりといった視覚刺激によって

[illegible]
$$x_1, x_2, x_3, x_4$$

a
b

--	--

11	6	1
かる		
12	7	2
えた		
13	8	3
ねる		
14	9	4
める		
15	10	5
く		